



小編成バンドに於ける諸問題とその指導法について の実践的考察

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学岩見沢分校 公開日: 2017-07-07 キーワード: 作成者: 阿部, 博光 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00009231

小編成バンドに於ける諸問題と その指導法についての実践的考察

阿部博光

●まえがき

毎年、夏になるとたくさんのバンドのクリニックやコンクールの審査を務めさせて頂くが、ここ数年、全国的に45人～50人の大編成バンドが減少し、反対に20人～35人程の小編成バンドが増加している。また、小学校では器楽合奏としての位置付で、金管合奏や吹奏楽を導入しているケースがますます増えていく傾向にある。(表I参照¹⁾)

そのため、中学校・高校の音楽教師ばかりでなく小学校の現場においても吹奏楽の指導能力をもった教師の需要は高まる一方である。

本論は、表Iからも明確なように、小学生バンドから社会人バンドまでの増加を踏まえ、そのようなバンドの指導的立場に立つ人たちのために、実践的、かつ効率性の高い合奏指導法とは、どうあるべきかを考察するものである。

〈表I-1〉平成3年から平成7年までの5年間の吹奏楽コンクール参加団体の変移

○全国合計

平成	小学	中 学			高 校			大学	職場	一般	合計
		大編成	小編成	合計	大編成	小編成	合計				
3年	436	1951	3437	5388	1370	1298	2668	120	35	391	9038
4年	473	2024	3564	5598	1365	1382	2767	121	38	411	9406
5年	480	2017	3619	5636	1386	1366	2762	137	43	425	9483
6年	506	1799	3823	5622	1285	1500	2785	142	44	459	9558
7年	505	1655	3796	5651	1324	1493	2617	157	47	485	9662

・全日本吹奏楽コンクール全国大会プログラムより(平3～7年)

○北海道地区の合計

平成	小学	中 学			高 校			大学	職場	一般	合計
		大編成	小編成	合計	大編成	小編成	合計				
3年	57	52	252	304	45	114	159	9	3	35	567
4年	66	58	242	300	47	126	173	11	3	39	602
5年	68	60	262	322	48	117	165	12	3	43	618
6年	69	56	260	316	41	127	168	12	4	44	618
7年	70	55	270	325	44	123	167	14	4	49	629

・全日本吹奏楽コンクール全国大会プログラムより(平3～7年)

● 全国の吹奏楽界の現状

全国的に生徒数の減少にともない、中学校や高校での吹奏楽部への入部希望者が少なくなり、大編成バンドの維持が難しい状況になってきている。この傾向は、平成3年から平成7年までの吹奏楽コンクール参加団体数の統計(表I)にも、はっきりと表れている。

全国の統計(表I-1)からいけば、中学校の大編成バンドは、この5年間で18%減少し、小編成バンドは反対に10%増加している。高校では、大編成バンドの減少は6%にとどまっているが、小編成バンドは16%の増加となっている。北海道の統計(表I-2)でも、その傾向は見られるが、その割合は低く指導者の努力のもと、安定した活動がなされている点、高く評価されている。

また、小学生バンドの増加という傾向も、この5年の間で大変著しく、全国では16%の増加、北海道では実に22%も増加している。これは、小学生の身体の成長が早くなり体格的にも演奏が可能となってきた事、また、吹奏楽の大きな特色である「マーチング」に人気がある事等が、大きな原因かと推測される。²⁾

同様に、大学・職場・一般でもコンクールへの参加団体数の増加が認められるが、特にその中で注目に値するのは、一般バンドの増加であろう。生涯教育の必要性を唱えられて久しいが、このことは、社会教育の中における吹奏楽活動の意義を広く認めさせるものである。

しかし、その反面、バンドの活動がコンクール中心になる傾向も強く、音楽を楽しむ姿勢やその本質的な喜びと掛け離れた方向に進んでしまう場合もあり、中・高生のバンド離れという現実もあることを、真摯に受け止めなければならないだろう。このような点からも、これからの吹奏楽指導者に何が求められているのかをしっかりととらえ、指導能力を有した教員養成の必要性が、社会からも求められている。

● 吹奏楽活動、及びその編成時におこりやすい問題点

これから述べる4つの項目の問題は、大きな編成のバンドにも関係してくる部分もあるが、特に新しく生まれた小さなバンドや、初めてバンドを指導する教師が、必ずぶつかる問題であり、これらのことを解決できることが、楽しい吹奏楽活動のスタートと言えるだろう。

1. 編成上の問題

一口に少編成バンドといっても、それぞれのバンドの人数も異なり、また所有している楽器の数、種類もまちまちだろう。そして、その限られた状況の中でバンドを編成し、活動しているというのが実態であろう。予算がなければ楽器も増えないし、反対に楽器があっても人がいない。こういうケースがとて多いのだが、合奏体として考えた場合、最も重要なポイントは、しっかりとしたバランスを作りやすい楽器編成を組むという点にある。希望者が多いからといって、フルートやサクソだけが多かったり、チューバがいなかったりしたら、合奏体としては最初から爆弾を抱えているようなものである。

それでは、一体どのような部分に注意して各パートの編成を決めていくべきかを、そのポイントと理由を表II³⁾にしたがいながら解説することにする。

〈表Ⅱ－1〉

○編成数に対する楽器編成の例

楽器名（略号）	編 成						
	9名	15名	20名	25名	30名	35名	40名
フルート（Fl） （ピッコロ持替）（Picc.）		1(1)	2(1)	2(1)	3(1)	3(1)	3(1)
オーボエ（Ob）							1
Es・クラリネット（Es, Cl）						1	1
Bb・クラリネット（Bb, Cl）	2	3	3	5	6	6	7
バス・クラリネット（Bass, Cl）					1	1	1
アルト・サクソ（A, Sax）	1	1	2	2	2	2	2
テナー・サクソ（T, Sax）	1	1	1	1	1	1	1
バリトン・サクソ（Bar, Sax）			1	1	1	1	1
ファゴット（Fg）							1
トランペット（Tp）	2	2	2	3	3	3	3
コルネット（Cor）							2
ホルン（Hr）	1	2	2	3	3	4	4
トロンボーン（Tb）	1	2	2	3	3	3	3
ユーフォニウム（Euph）		1	1	1	1	2	2
チューバ（Tuba）	1	1	1	1	2	2	2
弦バス（St. Bass）						1	1
打楽器（Perc）		1	3	3	4	5	5

・9名編成

まず何人からの編成を合奏体と呼ぶのか問題だが、全日本吹奏楽連盟主催のアンサンブルコンクールでは、8名編成までをアンサンブルというので、9名からを合奏体として検討してみることにした。

この場合、クラリネット2本とトランペット2本というのが特色で、デュエットの形で旋律を担当し、サクソ2本とホルン、トロンボーンは、ハーモニーと副旋律を担当する。チューバはサウンド全体の土台と、リズム系の中心としての役割を果たすことになる。この編成は非常に無理があるが、アンサンブル能力を高める上では、とても勉強になる編成なので、人数の多いバンドでも、こういった形態で練習することをすすめる。

・15名編成

クラリネット3本の音色を軸に、サクソ・トランペット・ホルン・トロンボーンが、各2本となりデュエットとハーモニーを作り出せる。ユーフォニウムとチューバが、充実したサウンドを支える。フルートのピッコロ持ち替えは必修。打楽器も複数の楽器を演奏できるようにする。

・20名編成

この大きさになると木管の低音楽器が欲しくなるのだが、バス・クラリネットあるいはバリトン・サクソのどちらかとなれば、効果を考え、バリトン・サクソを先に入れた方が良いでしょう。

・25名編成

トランペット・ホルン・トロンボーンが充実し、合奏体としては、基本的な編成といえるだろう。演奏できる曲目の巾も広がるので打楽器は、あらゆる組み合わせで、演奏可能にする必要性が高まる。

・30名編成

バス・クラリネットの加入が可能であり、又、是非入れなければならない楽器である。チューバの複数化、フルートパートの充実がはかれる。個々の技術がしっかりしていれば、バランス的には理想に近い編成で、第一段階としてはこの編成を一つの目標とすべきであろう。

・35名編成

ここからは、バンドの特色を出していく余裕が生まれる。E s クラリネットを加えたり、ユーフォニウムを複数化すれば表現力は豊かになる。コントラバスの加入ができれば、新しいサウンドの世界へと入っていける。

・40名編成

スクールバンドとしては、贅沢なオーボエやファゴットを加入できたり、ホルネットを2本プラスすることで、金管の音色も柔らかくなる。あらゆるジャンルの曲へ積極的に取り組める編成である。

〈表Ⅱ-2〉

○楽器購入の優先順位の例

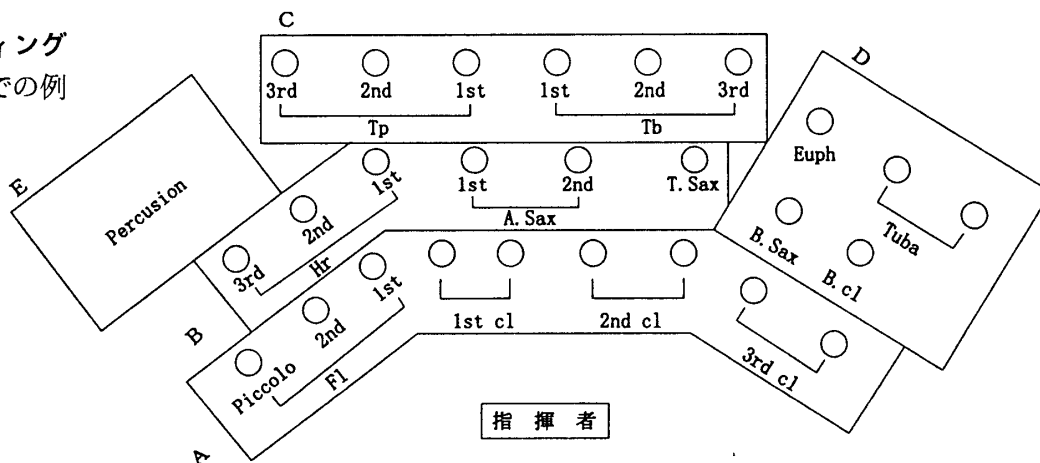
楽 器 名	順 番						
	11(11)	17	27				
フルート (ピッコロ)							
オーボエ	39						
E s ・クラリネット	31						
B b ・クラリネット	1 st	1 st	1 st	2 nd	2 nd	3 rd	3 rd
	1	19	36	2	25	13	26
バス・クラリネット	28						
アルト・サクソ	1 st	2 nd					
	3	21					
テナー・サクソ	4						
バリトン・サクソ	18						
ファゴット	40						
トランペット	1 st	2 nd	3 rd				
	5	6	22				
ホルネット	37	38					
ホルン	1 st	2 nd	3 rd	4 rh			
	7	14	23	34			
トロンボーン	1 st	2 nd	3 rd				
	8	15	24				
ユーフォニウム	12	32					
チューバ	9	29					
弦バス	33						
打楽器	10	16	20	30	35		

表Ⅱ-2は、40名編成まででもしも楽器購入に優先順位を付けるとした場合の一例である。

部員がいる、いないにかかわらず、予算がある場合は、この表の流れにしたがって購入しておく、将来部員が増えた時に、良い結果が生れるだろう。

2. セッティング

30名編成での例



楽器の性格から、まず次の5つのグループに分ける。

- A：高音域の木管楽器群
- B：中音域のハーモニー楽器群
- C：バンドの中心となるトランペット、トロンボーン群
- D：低音楽器群
- E：打楽器セクション群

この配置のポイント⁴⁾

- i. テンポ・リズムの中心になる打楽器群と低音楽器群を両サイドに置く。
- ii. バンドの顔となるトランペット、トロンボーンを最後列に置き、バンド全員が、同じ志向性をもって練習できるようにする。
- iii. 音量的に弱い木管楽器を前列に並べる。
- iv. ハーモニー楽器のホルン・サクスは、中間に位置し、全体のサウンドをブレンドさせる役目を果たせるようにする。

人数が変化した場合、このポイントを念頭に入れて、列を増やしたり、巾を広げたりすることで、合奏体のバランスを常にとっていく。

3. 選曲と楽譜の書き直し方

小編成のバンドが曲を選ぶ時、技術的にも編成的にも無理のないオリジナル作品を選ぶのが一番良いのだが、音楽的要求が高まれば少々無理をしてでも魅力ある曲をやりたいと思うのは、良く理解できることである。しかし、その場合、十分に注意しなければならないのが、メロディー、ハーモニーなどの音楽的要素が欠落しないこと。そして、バランスが悪くならないことである。（メンバーの演奏能力の差から生まれるバランスの問題もここに含まれる。）

この2つの問題を解決するために、楽譜の書き直しが必要となってくるわけだが、書き直しといってもその目的によって方法が違うので、具体例を示しながら説明することにする。

a. パートの書き直し

〈譜例1〉 露木正登 作曲 交響的譚詩⁵⁾より、5～8小節目

この4小節間のホルンパートは、非常に音域が高く、はずれる危険性が高い。又、全体が *ff* なので聞こえてこない。こういった場合は、アルト・サクスを重ねて演奏させることで解決できる。

〈譜例2〉 上岡洋一⁶⁾作曲 はるか、大地へ [L]から

Musical score for Example 2, showing woodwind parts. The score includes Piccolo, Flute 1 and 2, Oboe, Bassoon, Clarinet 1, 2, and 3, Alto Clarinet, Bass Clarinet, Saxophone 1 and 2, Tenor Saxophone, and Baritone Saxophone. A box labeled [L] highlights the first four measures of the Clarinet 1 part. A double-headed arrow indicates the addition of Saxophone 1 and Flute 1 to this section.

[L]からのクラリネットのメロディーが、ハーモニーに消されやすい部分なので、サクソ1本と、フルートを加える。クラリネットの中でも2番3番を1本にしメロディーのユニゾンを増強する。

b. 音程を合わせるための楽器を減らす方法

〈譜例3〉 松浦欣也⁷⁾作曲 般若

Musical score for Example 3, showing brass parts. The score includes Saxophone 1 and 2, Trumpet 1, 2, and 3, and Horn 1, 2, and 3. A circled handwritten note "カット" (cut) is placed over the Trumpet 1 part, with arrows pointing to the parts of the other brass instruments that are to be reduced. The score includes dynamics like *ff* and *molto dim. p*, and a tempo marking of *rit.* with a box containing "D" and "♩ = 50 ca."

〔D〕の1小節前で、9つのパートすべてが、Cisのユニゾンになるが、その為、音が濁りやすく、しかも、molto dimなので、人数を減らすことでその効果を上げやすくする。

c. バランスを取るための強弱の書き換え

〈譜例4〉 はるかなる大地 〔B〕

〔B〕のクラリネットとホルンのメロディーを浮き上がらせるために、全音符でのハーモニーの強弱を変える。

〈譜例5〉 般若 52小節から

55小節目からのトランペットのメロディーのために、サクソや他の金管の強弱を変える。

d. 難しいパッセージを簡単にするために

〈譜例6〉 はるかなる大地 [C]

[C]からのクラリネットの難しい動きのパッセージを次のように分解する。

〈譜例7〉

これらの方法を組み合わせながら、自分たちのバンドに合った楽譜の書き直しを行なうことにより、バランスの良い演奏を生み出していけるのだ。

4. チューニング

小編成バンドは人数が少ない分、音が合いやすい。また、音が合うことによりサウンドの広がりが出てくるので表現力も豊かになる。そのためにも、チューニング⁸⁾には十分に注意を払って取り組まなければならない。

〈チューニング時のチェックポイント〉

a. 長い時間をかけない

チューニングは、長い時間をかけると、最初の人と最後の人とで合わなくなるなど、逆効果なので、短い時間でできるようにした方がよい。

そのために、バンドのピッチを決めておく必要がある。A=442が良いが夏の暑い時期は、A=444、冬はA=440にする方が、合わせやすいだろう。そして、日頃、自分の楽器がどれくらい抜いている状態でその音程になるかをチェックしておく。吹き方が安定してくれば、日によっての変化は少なく、ほとんど同じ抜き方で合うはずで、この方法がマスターできれば、短い時間で音が良く合うようになる。

b. 自分の耳で判断する

最近、チューナーが安価で手に入り、それを使うのは良いことだが、どうしても目で音程を判断してしまう欠点がある。合奏中は、チューナーの使用は不可能で自分の耳で常にチェックしなければならないのだから、日常の練習でも、オルガンや、チューナー等で音を出し、それに合わせることの練習を積み上げることが必要である。

c. 複数の音を使ってチューニングする。

普通、チューニングの時、AあるいはB♭でするだろうが、個人練習やパート練習の中では、オクターブや完全5度など幅広い音域でのチューニングをする必要がある。管楽器はオクターブの音程がとれるようになれば奏法も安定してくる。又、完全5度や3度の取り方を練習することで、美しいハーモニーを作る基礎にもなる。合わせる1つの音に対し次の譜例のような型で練習することで、さらに安定した音程を作り出していくことができる。

〈譜例8〉

The image shows two musical staves. The top staff is labeled "合わせる楽器" (Instrument to be tuned). It contains a sequence of notes: a whole note G4, followed by a half note F4, a half note E4, a half note D4, a half note C4, a half note B3, a half note A3, and a half note G3. The bottom staff contains a sequence of notes: a whole note G4, followed by a half note F4, a half note E4, a half note D4, a half note C4, a half note B3, a half note A3, and a half note G3. There are slurs over the notes in both staves, and a circled 'c' above the first note of each staff. A note below the first staff reads "・オルガンで伸ばしておく" (Keep extended with organ).

●効果的かつ効率的な合奏の指導法

バンドの部員減少の一つの理由として、毎日の練習時間が長く、やりたいことの多い生徒にとって拘束される印象が強いのではないだろうか。

そこで、効率的な練習方法を工夫することで、時間の短縮をはかり、かつ音楽的密度を高め、生徒たちも積極的に練習に参加できるような指導ができないものか。その方法を模索すべく試みを、高校生のバンドをモデルにして行なったが、その練習方法と問題点を検討し、指導法を考察してみた。

—スウェアリンゲン作曲、狂詩曲「ノベナ」⁹⁾ を使っての実践的試み—

この試みは、北海道空知地区吹奏楽連盟の主催で、指導者講習会¹⁰⁾ という形で行なわれた。内容は、高校生の合同バンド（35人編成）を編成し、スウェアリンゲン作曲の狂詩曲「ノベナ」を、当日まで、1時間程の譜読みしかしない状態で集まってもらい、午前・午後、合わせて4時間という限られた時間の中で、「どのようにしたら効率的に練習を進められるか」というテーマで行なった。

参加者のほとんどがバンドの指導者で、当日は、演奏曲のスコアも配られるということだったので、私がこの曲を練習するにあたり、事前にどのような準備をしてきたのか、その部分の説明から始めた。

・スコアリーディング

4時間という短い時間の中で効率的な練習をしなければならず、しかも自分自身もこの曲を指導や指揮するのは初めてだった。

“それでは、いったい何をすべきか？”

私が一番ポイントを置いて準備した事は、スコアを十分に読むこと〈スコアリーディング〉だった。曲の構成、音楽の変化を明らかにするためにスコアを読んで分析し、注意すべきポイントを書き込んでいく作業だ。

その作業は次の5つの項目にしたがって行なった。

1. 作曲家の経歴、演奏する曲の題名を調べる
2. フレーズ、構成を明確にするために、縦線を加える
3. 調性、ハーモニーを調べる

4. リーダーになっているパートと、同じ役割のパートのグループ化
5. 明確な指揮をするための書き込み
 - ・新たに加わる楽器のチェック
 - ・拍子、テンポの変化に対するチェック
 - ・強弱をはっきり認識するためのチェック

各項目の実践方法の解説

1. 作曲家の経歴と題名の意味を調べる

ここでは、音楽辞典、CDなどの解説書、スコアに書いてある前書き等を利用し、その作曲家の時代背景、様式、他の代表的な作品等を調べる。

題名があればその意味、又、作曲された動機を知ること重要である。

この「ノベナ」は「カソリックの9日間の祈り」という意味なのだが、これは序奏部のAdagioのテンポをきめる重要なポイントになる。

2. フレーズ、構成を明確にするために縦線を加える

〈譜例9〉 ノベナ p. 2、3

Commissioned by and dedicated to Rob Hennell and the Antwerp H.S. Concert Band, Antwerp, Ohio

NOVENA

Rhapsody for Band

James Swearingen

I Conductor Score
Performance time: 6:00

75 Adagio $\text{♩} = 60-66$ 3 *espress.*

Piccolo
Flutes
Oboes
Clarinets 2
Clarinets 1
Alto saxophones
Tenor saxophone
Baritone saxophone
Trombones 3
Trombones 2
Trombones 1

Annotations in score:
 - *espress.*
 - *p*
 - *pp*
 - *stronger breathing*
 - *(one player only)*

小編成バンドに於ける諸問題とその指導法についての実践的考察（阿部博光）

snare 2
3
tom-tom
chimes
snare (hard felt sticks) Eb-A-B-G
Drum
tom-tom

© Copyright 1980 by C. L. Barnhouse Co., Oskaloosa, Iowa 52577
International Copyright Secured Made in U. S. A. All Rights Reserved

Molto espressivo

Flc.
Fl.
Obs.
Ch. 1
Ch. 2
A. Cl.
B. Cl.
A. Sax.
Sax. 2
T. Sax.
Bar. Sax.
Bar.
Horn 1
Horn 2
Horn 3
Horn 4
Cora. 1
Cora. 2
Him.
Him. 2
Trbn. 1
Trbn. 2
Hr.
Bass.
Mallets
Timp.
S. Dr.
B. Dr.
Cym.
Sub. Cym.

Molto espressivo

2911

この作業は、スコアを横に読んで行くことで、序奏やフレーズの長さ、役割を理解していく手がかりを見つけ出す方法である。

〈譜例〉のとおり、ここでは、1～2小節目が教会の鐘を意味し、3～10小節目までの8小節が第1テーマとなり、⑬から第2テーマとなるが、その前の2小節目は、第1テーマとの橋渡しの役割を果たしている。

⑳からの12小節目は、序奏の終結部となり㉓からの第1テーマへとつながっている事等が読み取れる。

3. 調性、ハーモニーを調べる

〈譜例10〉 ノベナ p. 15～16

The image shows a page of a musical score for 'Novena' (p. 15-16). The score is written for a large ensemble, including woodwinds (Flute, Oboe, Clarinet, Bassoon), brass (Trumpet, Trombone, Baritone, Bass), strings, and percussion (Timpani, Snare, Cymbal). The score is marked with 'marc.' (marcato) and 'f' (forte) throughout. At the bottom of the page, there are handwritten notes: 'Bb', 'C', and 'Des Es', which likely refer to different keys or modes used in the piece.

この作業は、スコアを縦に読む作業で、どのような響きができるかを知る手がかりとなる。88からは、調性はBb durなのだが、92はDes dur、93はEs durの和音が鳴り響き、94からはF durとなり、96のBb durに解決していく。

〈譜例11〉 ノベナ p. 22

The image shows a page of a musical score for a concert band, page 22. The score is written for multiple instruments, likely including woodwinds, brass, and percussion. The tempo and dynamics markings are: *Allargando*, *Maestoso* (starting at measure 133), and *molto rit.*. The score is divided into two systems. The first system starts with *Allargando* and *Maestoso* markings. The second system also starts with *Allargando* and *Maestoso* markings, followed by *molto rit.* and *div.* markings. The score is annotated with handwritten notes at the bottom: Bb, C, D, C, Bb, H, Bb. These notes correspond to the harmonic changes described in the text below.

終結部で、133 から1小節ごとに、Bb dur、C dur、D dur、C durとなり、137 では、1～2拍目が、Bb durで3～4拍目がH durとなり138 でBb durに解決する。137 のH durは難しい和声なので、しっかり合わせる必要があり、練習でなにをすべきかが明確になってくる。

4. リーダーになっているパートと、同じ役割のパートのグループ化

ここでの作業は、各パートが受け持っている音符を、機能・性格によって分類別けしていき、効果的かつ効率的練習を工夫するための重要な部分である。

同じ機能のパートのグループ化で、同じ指示を繰り返す必要がなくなる。又、リーダーとなっているパートに、その性格付を明瞭にすることで、合奏の中での各パートの存在理由を理解することができるようになり、合奏に一つの方向性が生まれ効率的で本質的な練習へ展開できるようになる。

〈譜例12〉

ノベナ

p. 3~5

13 A・B・Cの
3つのグループ化

The image shows a complex musical score for a piece titled 'Novena' (p. 3-5). The score is organized into three distinct groups, labeled A, B, and C, which correspond to the 'A・B・Cの3つのグループ化' (Grouping into 3 groups of A・B・C) mentioned in the text. Each group consists of multiple staves, likely representing different instruments or voices. The notation includes various musical symbols such as notes, rests, and dynamic markings (e.g., 'p' for piano, 'f' for forte). The score is presented in a vertical layout, with the groups of staves stacked vertically. The overall structure is highly organized, reflecting the 'grouping' process described in the text.

〈譜例13〉 ノベナ p. 10~11、13~15

56からの12小節間と80からの12小節間で、同じ役割が、木管・金管で交代されている。

〈譜例14〉 ノベナ p. 12~13

68から2小節ごとに同じフレーズが転調して現われる。72からは、F durの和音を順番に重ねていく。

〈譜例15〉 ノベナ p. 16

16

96 Slowly espressivo J. 66

Flute

Clarinet

Saxophone

Trumpet

Trombone

Percussion

Drums

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

311

312

313

314

315

316

317

318

319

320

321

322

323

324

325

326

327

328

329

330

331

332

333

334

335

336

337

338

339

340

341

342

343

344

345

346

347

348

349

350

351

352

353

354

355

356

357

358

359

360

361

362

363

364

365

366

367

368

369

370

371

372

373

374

375

376

377

378

379

380

381

382

383

384

385

386

387

388

389

390

391

392

393

394

395

396

397

398

399

400

401

402

403

404

405

406

407

408

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

429

430

431

432

433

434

435

436

437

438

439

440

441

442

443

444

445

446

447

448

449

450

451

452

453

454

455

456

457

458

459

460

461

462

463

464

465

466

467

468

469

470

471

472

473

474

475

476

477

478

479

480

481

482

483

484

485

486

487

488

489

490

491

492

493

494

495

496

497

498

499

500

501

502

503

504

505

506

507

508

509

510

511

512

513

514

515

516

517

518

519

520

521

522

523

524

525

526

527

528

529

530

531

532

533

534

535

536

537

538

539

540

541

542

543

544

545

546

547

548

549

550

551

552

553

554

555

556

557

558

559

560

561

562

563

564

565

566

567

568

569

570

571

572

573

574

575

576

577

578

579

580

581

582

583

584

585

586

587

588

589

590

591

592

593

594

595

596

597

598

599

600

601

602

603

604

605

606

607

608

609

610

611

612

613

614

615

616

617

618

619

620

621

622

623

624

625

626

627

628

629

630

631

632

633

634

635

636

637

638

639

640

641

642

643

644

645

646

647

648

649

650

651

652

653

654

655

656

657

658

659

660

661

662

663

664

665

666

667

668

669

670

671

672

673

674

675

676

677

678

679

680

681

682

683

684

685

686

687

688

689

690

691

692

693

694

695

696

697

698

699

700

701

702

703

704

705

706

707

708

709

710

711

712

713

714

715

716

717

718

719

720

721

722

723

724

725

726

727

728

729

730

731

732

733

734

735

736

737

738

739

740

741

742

743

744

745

746

747

748

749

750

751

752

753

754

755

756

757

758

759

760

761

762

763

764

765

766

767

768

769

770

771

772

773

774

775

776

777

778

779

780

781

782

783

784

785

786

787

788

789

790

791

792

793

794

795

796

797

798

799

800

801

802

803

804

805

806

807

808

809

810

811

812

813

814

815

816

817

818

819

820

821

822

823

824

825

826

827

828

829

830

831

832

833

834

835

836

837

838

839

840

841

842

843

844

845

846

847

848

849

850

851

852

853

854

855

856

857

858

859

860

861

862

863

864

865

866

867

868

869

870

871

872

873

874

875

876

877

878

879

880

881

882

883

884

885

886

887

888

889

890

891

892

893

894

895

896

897

898

899

900

901

902

903

904

905

906

907

908

909

910

911

912

913

914

915

916

917

918

919

920

921

922

923

924

925

926

927

928

929

930

931

932

933

934

935

936

937

938

939

940

941

942

943

944

945

946

947

948

949

950

951

952

953

954

955

956

957

958

959

960

961

962

963

964

965

966

967

968

969

970

971

972

973

974

975

976

977

978

979

980

981

982

983

984

985

986

987

988

989

990

991

992

993

994

995

996

997

998

999

1000

96からハーモニーのグループとメロディー。メロディーも、1小節ずつ受け渡していく。

5. 明確な指揮・指示をする為の書き込み

バンドの練習時に指導者が指揮をする中で、落着いて明確な指示ができるように¹¹⁾、次のような書き込みをする必要がある。

・新たに加わるパート名のチェック

Fl、Cl、A・Sax、w.w. などのように楽器名を書き加える。

〈譜例16〉 ノベナ p. 2~3

Commissioned by and dedicated to Rob Hennell and the Antwerp H.S. Concert Band, Antwerp, Ohio

NOVENA

Rhapsody for Band

James Swearingen

1 Conductor Score
 Performance time: 6:00
 75 Adagio J. 60-66

© Copyright 1980 by C. L. Barnhouse Co., Okaloosa, Iowa 51577
 International Copyright Secured Made in U. S. A. All Rights Reserved

The image shows a page of a musical score for a concert band. The score is written for various instruments and includes several performance instructions and annotations. The instruments listed on the left side of the page are: Picc., Fl., Obs., Cl. 2, A. Cl., B. Cl., A. Sax., T. Sax., Bar. Sax., Horn, Horn, Trb. 2, Trb., Euph., Basses, Valt. 2, Timp., S. H., H. H., and Cym. The score is divided into measures, and there are several dynamic markings such as *Molto espressivo* and *tutti*. Handwritten annotations in black ink are present throughout the score, including 'W' in the Flute and Oboe staves, 'A Sax' and 'T Sax' in the Saxophone staves, 'Cor' in the Horn staves, 'Tb' in the Trombone staves, 'Euph' in the Euphonium staff, and 'Bass' in the Bass staff. There are also some numerical markings like '13' and '14' in the top right corner. The page number '2911' is located at the bottom left corner.

・拍子、テンポの変化に対するチェック

〈譜例17〉 ノベナ p. 22

テンポが速くなる部分 (accel. string) では \longrightarrow
 テンポが遅くなる部分 (rit. allargando) では $\sim\sim\sim\sim\sim$ と、書き入れる。
 拍子の変化は「ノベナ」ではないが、4/4から3/4になる時は3/4の部分に△を。
 2/4の時には∨と書く。
 変拍子では、次のように書き込むのが良い。
 5拍子系：∨+△、△+∨
 7拍子系：∨+∨+△、∨+△+∨、△+∨+∨

f・pなどの強弱記号を明確にする。この時、全体の大きさを示す場合と、パートによっては、違いがある場合があるので注意する。

cresc. dim.など強弱の変化に関する記号では、どこからそれが有効になり、どこのポイントが最も大きく、或いは小さくなるのかをチェックする。

アクセント・スラー・テヌートなどの表現に関する記号のチェックもここですと良い。

《合奏中に出てきた3つの問題点》

スコアリーディングの解説後の練習で、効率の良い練習を妨げる3つの問題点が出てきた。

1. バンド全体で音名の呼び方が統一されていない。
2. 「実音」「記譜上の音」ということが理解されていない。
3. 音楽表現に関する楽語に対してのイメージができていない。

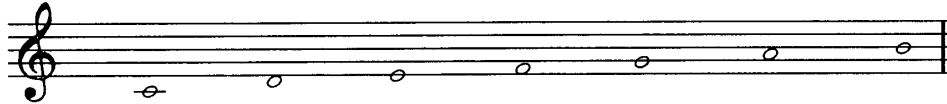
この3つの問題が解決していない場合、ハーモニーひとつの練習をとっても、指導者がすべてのパートの音を説明し直さなければならないし、どんな音楽を作りたいかということも、伝わりづらく、質的にも時間的にも良い練習をすることが難しくなる。

3つの問題の解決法

1. 音名の呼び方の統一

日常的に指導者が使っている呼び方で統一すれば良いが、別表-1のようにドイツ音名であるのが最も効率的で発展性がある。

・ドイツ音色による記号と呼び方¹²⁾（別表-1）



	C	D	E	F	G	A	H
	ツェー	デー	エー	エフ	ゲー	アー	ハー
(#)	Cis	Dis	Eis	Fis	Gis	Ais	His
	ツイス	ディス	エイス	フィス	ギス	アイス	ヒス
(b)	Ces	Des	Es	Fes	Ges	As	B
	ツェス	デス	エス	フェス	ゲス	アス	ベー

2. 実音と記譜上の音の理解

まずは、自分の楽器のいわゆる「ド(c)」の音が楽器によっては、実際に出ているおとが違うことを知らなければならない。別表-2のように、「ド」を吹いた時、ピアノの「ド」と同じ音が出る楽器を、in Cの楽器と言う。「ド」を出したつもりなのに、ピアノでは「シb(Bb)」が出た楽器は、in Bbの楽器と言う。同様にして、「ミb(Es)」が出たら in Esの楽器。「ファ(F)」が出たら in Fの楽器である。そして、in C以外の楽器が、「ド」と思ったその「ド」のことを、記譜上のドと言ひ、実際に出た、シb・ミb・ファのことを実音という。

各楽器の調子の分類¹³⁾（「ド」を吹いた時に出る音による）（別表-2）

実際に出る音	木 管	金 管
in C (ハ長調)	Fl, Piccolo, Ob, Fg	Tb, Euph, Bar, Tuba
in Bb (変口調)	Cl, B. Cl, T. Sax	Tp, Cor
in Es (変ホ調)	EsCl, A, Cl, A. Sax, Bar. Sax	A. Hr
in F (ヘ 調)	Eng. Hr	Hr

記譜の音と実音の例¹⁴⁾

記譜音

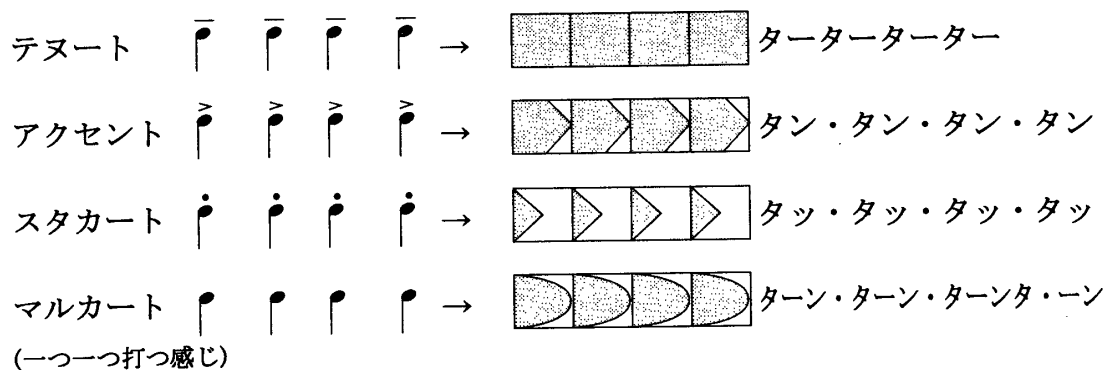
実音



この2つをしっかりと理解できるよう日常の練習で、「記譜では何の音」「実音では何の音」という指示を習慣にすべきだ。

3. 楽語に対するイメージ

音楽の表現を練習する時、アクセント・スタカート・テヌート・マルカートなどの楽語を使うが、その楽語が、どういったニュアンスの音を要求しているのか、理解できていないことが多い。もちろん、これは非常に高度でデリケートな問題だが、その解決法として、どのような音を出したら良いのかを、図形化・擬音化することをすすめる。ここでは、耳で聴くべき音を目で見てイメージするという方法をとることとする。



• まとめ

吹奏楽、バンドをする大きな目的は、音楽文化や芸術に対する感性を豊かにすることや、その集団作業の中で、社会性や協調性を学ぶところにある。

本論は、その運営、練習法に関わる問題を考察してきたが、そのことが、質の高い練習、しいては“楽しい練習”に発展することを期待している。

楽しい練習には、次の3点が重要だ。

1. 自主性と個性を尊重する。
2. 目的がはっきりし無駄な疲労感がない。
3. 達成感があり満足度が高い。

この3つのポイントを大切に、子供一人ひとりの個性の確立と、その能力、感性を引き伸ばしていくことが、これからのバンド指導者に求められている部分であり、そのための一つの方法論として、本文の指導法が役に立つことを願っている。

注

- 1) 全日本吹奏楽コンクール 全国大会プログラムより 平成3年～7年
- 2) 昭和60年より北海道でのマーチングフェスティバルが始まり、現在は、全国大会もある。
- 3) 吹奏楽講座 第4巻 第1章 箕輪響著 p7～20 音楽之友社
- 4) 同上 p21～22
- 5) 全日本吹奏楽コンクール課題曲(1996年度) 露木正登作曲 吹奏楽のための交響的譚詩
- 6) 同上、上岡洋一作曲 はるか、大地へ
- 7) 同上、松浦欣也作曲 般若 以上 全日本吹奏楽連盟版
- 8) 吹奏楽講座 第4巻 第2章 鈴木竹男著

- 9) James Swearingen, Rhapsody for Band “NOVENA” c.c.Barnhouse Company.
- 10) 空知地区吹奏楽連盟（相沢清理事長）が、吹奏楽指導法の研究のため、指導者を対象に毎年開催しているもの。
- 11) 「オーケストラの知識」 テオ・メリッヒ著 指揮・合奏・鑑賞のために p.9 シンフォニア
- 12) バンド指導のポイント20 合奏指導編 竹内俊一著 p. 19 音楽之友社
- 13) 同上 p. 12
- 14) 同上 p. 19

（阿部博光：岩見沢校 音楽研究室）